

獨協埼玉高等学校 令和3年度 第三者評価

実施日6月21日

高等学校

1. 積極的に学ぶ姿勢を促し、自らの考えと表現をする活動機会の保証。

オンラインとなるが多かったにも関わらず学内達成度は高いので、現在の方向性が間違っていないと思われる。特にオンラインは対面式では消極的な生徒が活発になる事例もあるので、その点も効果があつたのではないか。

現代は高校。大学を問わず、問題・課題発見と解決の能力が求められているので、絶えずこの視点を忘れないように習慣づける必要がある。

獨協コースに関しては、私が各地で情報交換している限りでは、かなり高度な教育を実践していると誇れるものなので、自信を持って訴求すべきである。

2. 質の高い学習の確保と、大学進学に関して生徒・教員とも情報をより多く収集すること。

この点もソフト・ハード面の活用を含め、おおむね実践されている学内評価となっている。

主体的な学びに関連して、大学の総合型選抜で「探求」に関する入試制度が増加傾向。国公立大学にもあるので軽視できない。この入試方式については特定の教員や科目で完結しないこともあり、さらには解答が一つとも限らず(正答がないこともある)、探求を通じて学び方の会得を見ていることもある。今後ますます新しい学びの形として、教員同士の連携と情報交換も必要になるはず。他校の事例として、東大合格(推薦)生徒は複数の教員がプロジェクトを組み、生徒の夢を実現させたというものがあり、参考になる点も多い。

3. 登下校時のマナー問題。

中学の項目と同様、集団心理の際に注意。特に登下校時の駅前の直接指導は、道を複数人で広がって歩いていることが原因と考えられる。登校時より下校時に、気の緩み故か苦情が多いのが一般的傾向なので、評価にも記されている通り、下校時の指導に注力するのがよい。とはいうものの、現実問題として友人複数と一緒に下校する際、軍隊調の一行で駅まで歩くのは非現実的でもある。道路の広さ、危険度、対向者の有無などを勘案して「ケースバイケースの判断を」と論じてみてはどうか。

4. 安全面の追求。

それぞれ特定の目的に応じた対応が必要な項目で、自己評価ではおおむね対応済とある。自然災害では以前あった竜巻、地震や落雷、豪雨など多様なケースが考えられるので、過去の事例を基にしたマニュアルを定期的に見直し、「いざというとき」に役立つようにする必要がある。